

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか

塩崎幸雄

1

世に詩（漢詩）は文学の女王と称せられる。これは一面美称といいうるが、その実は貶称と解すべきであろう。現今の文学に占める比重において、詩は決して王者たりえない、という含意なのである。あたかも夜空に照り映える月の如く超然たる趣を具えているとはいえ、白日のもと長安の大道を堂々闊歩するが如き文学王道の主人公ではない、との認識を動かすことは今となっては難いとしなければならぬ。史上、東亜一円において盛んに物されたくさぐさの名品も残んの月の影の如く過去の名残の夢に過ぎぬ。詩の形式のもとに産み出された夥しき作品の数は、無慮数万、ほとんど算に勝えざるところである。それは、いかに往時の人士が、作詩に励み、志操を一詩に籠めんとしたかを証して余りあるが、そのかつての栄光をもって現時の文学界に返り咲かしめんとするは夏日に氷塔を築くにも似て、甚だ報われぬ行いである。されど、唐詩の女王に仕う

ること、決して徒事ではない。ここにこそ、蹂み躪られた文化の燠火を、燦爛灼乎たる文化の火焰へと化せしむる秘鑰が潜められている、と信ずるからである。

2

漢詩のつくられなくなった一因として、空理としての平仄システムの保持に指を屈すべきであろう。つまり、実作者が平仄の意味する内奥をじかに感得することを、すくなくともわが国中世以降にあっては留意することがなかった、ということである。平仄機構は熱烈な支持を受けた。だが、ひとびとは、厳しい制約に縛られながらも、その一一の規則がいかなる因由をもつものであるかということに対しては、大抵の場合顧みることがなかったのである。詩を誦するるとき、わが国においては、言うまでもなく、訓読よる内容把持が終始一貫続けられてきた。しかし、そのことを指弾することほど不当なことはない。これは極めて示唆に富む問題である。わが国古代の無文字社会における民族宮

為、文化獲得までの想像を絶する苦闘の迹に、われわれは思いを致してみるべきであろう。まず最初にわれわれの父祖は、個々の文字の字体、字音、字義の獲得に着手したに相違なからう。そののちに、各々の文字と文字との繋がりについて探るべく、懸命な努力が続けられたのである。その際、父祖たちは大陸よりもたらされた外つ国の文書と、文字を持たぬ己が母語との間に存する語法上の大いなる相違に気付いたはずである。われわれが、父祖の懸命な試行錯誤の迹を回想するとき、そこに外国語習得のための努力を見出すのではなく、母語の建設、文字なき母語の文章化への苦闘をこそ見出すべきなのだ。そして、訓読を行うとき、われわれは、われわれと遠き父祖とを結ぶ体験の共有を思うべきなのである。漢詩文に習熟することは、とりもなおさず、父祖の有った文化への意志を数千年のときを超え己が身にあらためて喚び起こすことにほかならないのである。漢文教育と英語教育とを同一線上に並べて論ずべきではない。前者は民族精神の涵養に主眼があるのであり、

後者は単なる勉学のための工具の追加に過ぎないのである。現時政府の教育施策に見受けられる初等学童に対する英語教育の余殃は、十年を待たずして靦面に現れることである。思えば占領下の「カムカム英語」全盛時代など、へ文化への意志」減殺計画の規模の点からいえば、現代とは比

較にならぬほど幼稚低劣なものであったのである。今や、わが国は自ら進んで民族伝統の存続を放棄し、周到に目論まれた企図に沿って浮薄極まりない非文化国民創成へと勇躍邁進しているのである。文化なき「国旗・国歌法」など茶番だ。真に「文化の死」を歎くならば、文化のための教育と、文明のための教育との雑糅を糾すべきである。読書離れ、堅い本が売れない、漢字が書けない、などといったことは、問題の所在を見極めた者にとっては、副次的な、論ずるに足りない瑣事に過ぎないはずである。

3

田園都市線・池尻大橋駅ほど近くの三宿の交叉点にある古書肆「江口書店」の老主人が先頃亡くなられた由、仄聞して心を傷めた。豊富な品揃えといい、他店には見られぬ廉価といい、愛書家の間では夙に定評があった。筆者も数度足を運んで、Philippe Bourdrelの『フランス猶太人史』や島義武『南極探検と皇太神宮の奉斎』といった稀書を手して喜んだものである。昨秋の一夕、ストーブにかけられた薬罐のしゅうしゅう鳴る店内で、棚に並ぶ書物の背文字に眼を凝らしていると、いきなり「黙庵詩鈔 天来著」の七字が目飛び込んできた。禅僧の詩集かと思いつながらも披見すると、基督教界では漢詩人として名のある住谷

天来（一八六九—一九四四）の詩集である。

開けば巻頭、自序に言う。

勿論詩人ならざる著者の詩であるから本当の詩家が見れば一笑にも値しない唾棄すべきものであらう。故に是は唾詩に過ぎない。

然るに此の唾詩を臆面もなく敢て世に公けにする著者は愚に非ずんば狂であらう。然り誠に愚であり、狂である。あの頼三樹が『風雨多年苔石面。誰題日本古狂生』と吟じた詩は多分私の為にして置いた碑銘ではあるまい乎。

乍ら現代の日本のやうにお利巧揃ひの世の中に、一人位狂愚の詩の存するも亦以て一代の珍として誦す可き者に非ざらんや。

筆者は、悦びを泳えきれず迷わずこの詩集を購入した。

4

天来の名は、内村鑑三の畏友として最も知られている。天来の著書『孔子及孔子教』に附せられた内村の序言にこうある（新生堂、昭和十年、巻頭）。

余の友人住谷天来君は其性来の質より謂ふも、亦其学問の性質より考ふるも純粹の漢学者である。然るに此人が孔子を師として仰がずにナザレ人イエスの弟子として事ふるのである。余が特に君を敬する所以は茲にある。

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか（塩崎）

ふたつのJを愛せる内村ならではの評語であろうか。

『黙庵詩鈔』（平和舎、昭和十六年）は、本文全二百五十六頁。前半百二十二頁までが詩集、それ以降の後半に散文（鬻鬻録）、小品（ユーゴーの熱想）「カーライルの宗教」「詩人ブラウニングの人生観」「サヴォナローラの時代と人物」「荘子の話」。以上五篇のうち、後四篇は内村刊行の「聖書之研究」誌にかつて寄稿せるものである。）を収める。巻頭に天来の自序、発行者である長谷川周治の序があり、巻末には政池仁（一九〇〇—一九八五）の跋を附す。長谷川は本書発行所の平和舎代表で、天来の親友であるとしかわからない。政池は内村門下で、『内村鑑三伝』（初版、三一書店、一九五三。再増補改訂新版、教文館、一九七七）の著がある。

長谷川の序に、天来と内村との親密なる交遊を物語る挿話で紹介されている（もと、天来が内村昇天に際し筆を執れる「内村先生を偲ぶ」に依るもの）。

君（内村——引用者註）と僕（天来——引用者註）とは心々相触れ靈々相通じどこか似通つて肝胆を披瀝するに都合のよい処があつたのであらう。君が始めて『愛吟』を出版する時その原稿を見せて、君自ら篇中の佳処を朗吟して、『どうだ住谷』と僕の肩を叩いて満足の顔を見て喜んだのも其一だし、『興国史談』や『ヨブ記』（完称は『旧約聖書約百記註解』——引用者註）やの出版の時、第一に僕に訂正させたのも然う

だ。鳥渡した詩歌の真似事をやつても笑を以て献酬したのも然うである。その他宗教に、文学に詩歌に哲学に提撕啐啄をして互いに交馳することを得たのは真に千古の快事であつた。之は終生余の忘れんとして忘るゝことの出来ざる喜であつて、誠に有難い神の恩寵として感謝する処である。然るに此の広い日本にこんな高貴の一人の友、いな二人としない大切な友を喪つたことは自分の慈母を喪つたのにまして更に罔極の悲愁である。

また、同序では内村側からの天来に対する懐いを述べた記述も引かれている(『内村鑑三全集』四十巻本、岩波書店)では、第二十三巻、三百九十四頁以下に所載)。

上州に来て余を大歓迎して呉れる者が唯一人ある、それは富岡組合教会の牧師住谷天来君である、君は余と同国同信同主義の人である、組合教会の牧師ではあるが最も非組合的人である、天来君一人が上州に在りて上州は余に取りて失はれたる国ではない。……有難し、有難し、牧師にして此慰言を送つて呉れる者は全世界に天来君一人あるのみ。

〈教会〉を嫌い、〈牧師〉を嫌い、〈宣教師〉を嫌い、そして〈基督教〉を嫌い、〈宗教〉を嫌つた内村の眼鏡に適いし天来の風骨とはいかなるものであつたか。そして、内村は天来の美質のうち何をもっとも愛したのか。筆者が思うに、やはり天来の有つ志操とその表出法との均衡にある

のではあるまいか。懐ける悠遠なる思想と、それを盛らんとする器としての適勁なる詩藻との一致の妙こそ、内村が畏敬してやまざるものではなかつたか。内村は、民族伝統のうちに根を持たぬ者、〈文化の清祓〉を受けざる者である。文化におけるデラシネ(Deracine)なのである。札幌農学校における教育はあらゆる学科を英語をもって教授するといふものであつた。また、そののちのアメリカでの長年月の留学生活は自ずと伝統からの疎隔をもたらした。内村、三十八歳の時(明治三十九年歳末)の言にこうある(圏点は引用者の附せるもの)。

扱て余は今年何を読みし乎と云ふに、余の読みし書は概ね英書なりしなり、余も少しは和漢の文を解し得ざるにはあらずれども英語を解し得るに至りてよりは和漢の書は何んとか味ひなきに至れり、余は勿論幾回となく太平記を復誦する者なり、平家物語は余のフェーボリットの一なり、古文真宝と唐詩選とは常に余の座右にあり、その他時には新刊物に目を曝さざるにあらず(多くは批評の爲め)、然れども余は表白す、余は一枚の和漢の書を読むに對して五十頁の英書を読む者なる事を、余の女学生は常に余に語て曰ふ、「先生は何時でも洋書のみお読みなさる」と。(内村「余の今年の読書」『内村鑑三全集』第七巻、四百八十三頁)

かかる脆弱な文化地盤に立てる内村なればこそ、天来と

いう存在のもつ稀有な価値にはしなくも氣付き得たのである。そして、己の喪失した民族伝統への憧憬こそが、内村の終生唱えたいいわゆる「日本自生の基督教」を産み出す原動力となったのである。

5

以下に列挙するは、『黙庵詩鈔』所載の全詩である。初学者のため作詩の良き模範を示すものであり、また非売品であるため詩を学ばんとする者の容易に目にするのできぬものと判断されるため、敢えて掲載するものである。古格にはずれるところ、また語法上の不整合（いわゆる和臭）なきにしもあらずではあるが、これくらいの勢いと分かりやすさがこれからの詩に求められるのではなからうか。間々見える禅味をまじえたる作は、旧套に墮したものが多く、天来の真骨頂を示すものとは言いがたい。野に吼ゆる天来の面目躍如たるは、やはり福音謳歌、福音讚美の諸篇である。福音と仏説とを雑糅せしめた意趣のものが幾つか見受けられるが、韜晦指向が窺われ思想的純度に乏しい。これは天来のために悲しまなければならぬ。

特殊な語にかぎり必要最小限の語意を添えた。訓読を併載したが、初学者の読誦を考慮して、必ずしも天来自身の附したやや奔放な訓読法に従ってはいない。

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか（塩崎）

天来の作には上記の如き欠点はあるものの、全篇を味読することにより、誰しも雄渾なる思想と、雄勁なる詩魂の絶妙なる一致を感得しうるはずである。また、作詩を志すものにとつては好適の龜鑑典範をそこに見出すに相違ない。（なお、『聖書』からの引用は、日本聖書協会発行「小形引照つき文語聖書」（一九七五）によつた。）

6

一

書懷

懷ひを書す

我詩素非詩

我が詩、素より詩にあらざるも

人呼是謂詩

人、是れを呼んで詩と謂ふ

詩史總一元

詩と史と総て一元なり

偶感述志耳

偶ま感じて志を述ぶるのみ

二

我詩亦是詩

我が詩も亦た是れ詩なり

人笑曰唾詩

人、笑いて唾詩と曰ふ

然唾詩亦詩

然るに唾詩も亦た詩なり

咳唾非謂珠

咳唾も珠と謂ふにあらずや

三

詩家多囚詩 詩家、詩に囚はるること多し
 我詩自由詩 我が詩は自由詩なり
 奔放飄逸時 奔放飄逸の時
 却有此妙詩 却つて此の妙詩あり

一、三は、一連の作。前掲自序を併せ見よ。

四

孤愁 孤愁
 放魂容宇宙 魂を放ちて宇宙を容れ
 心馳中外儔 心、馳せて 中外儔し
 故國渺萬里 故國 渺として万里
 孤愁長忡忡 孤愁 長へに忡忡たり

五

書懷 懷ひを書す
 人生僅百年 人生 僅かに百年なれど
 佛耶千萬部 仏耶 千万部なり
 理想如鯤鵬 理想 鯤鵬の如く
 現實似豕狗 現実 豕狗しきうに似たり
 豕狗逐不去 豕狗 逐へども去らず

鯤鵬招不來 鯤鵬 招けども来たらず
 欲伏迷羊心 迷羊心を伏せんと欲せば
 須聽靈獅吼 須らく靈獅の吼ゆるを聴くべし
 仏耶、仏典と聖書。迷羊心、迷える羊の心。

六

同上
 來時從天來 来たる時は天より来たり
 去時向天去 去る時は天に向かいて去る
 去來只此道 去来 只だ此の道のみなり
 人天何索居 人天 何ぞ索居せるや

七

日日又日日 日日又た日日
 所爲類兒戲 為す所 兒戲に類す
 霸圖悵兮已 霸圖 悵ちやうとして已やんぬるかな
 觸體笑草裡 觸體 草裡に笑う

八

昨我非今我 昨我は今我にあらず
 逝波異來波 逝く波は来たる波と異なれり

流轉何夫速 流転 何ぞ夫れ速き
宜握磨不磨 宜しく磨して磨せざるを握るべし

十二

滿室英哲辭 滿室 英哲の辭
壁上雄才詩 壁上 雄才の詩
行欽賞山水 行きては山水を欽賞し
坐愛翫書史 坐しては書史を愛翫す
清風入高樓 清風 高樓に入り
明月照九嶷 明月 九嶷を照らす
此時吸聖靈 此の時 聖靈を吸い
作詩兩三首 詩を作ること兩三首

九

寥廓發天籟 寥廓 天籟を発し
月出獨徘徊 月出でて独り徘徊す
霄衣冷如鐵 霄衣 冷やかなること鉄の如し
空庭一祈回 空庭に一たび祈りて回る

十

太廓父臨在 太廓に父臨在す
日星爛扇開 日星 爛として扇開す
天衣無縫處 天衣無縫の処
光明何可晦 光明 何ぞ晦すべけんや

十三

題三才 三才に題す
松 松
松松松待何超超 松松松 待つこと何ぞ超超たる
青青松是待望標 青青たる松 是れ待望の標なり
萬戸樹松頌聖朝 萬戸、松を樹て聖朝を頌ぎ
颯颯風濤曲極奇 颯颯たる風濤 曲、極めて奇なり
獨抱傲骨凌天表 独り傲骨を抱きて天表を凌ぐ

十一

書懷 懷ひを書す
一掃曠千春 一掃して千春を曠うし
笑殺古今人 笑殺す 古今の人を
誰知墨池戲 誰か知らん 墨池の戯れ
釋氣見天真 釋氣 天真を見ん

十四

竹 竹
竹竹竹竹是我師 竹竹竹 竹、是れ我が師なり

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

虚心容物氣振振
宜月宜風鬢篩金

虚心に物を容れて 氣、振振たり
月に宜しく 風に宜しく 鬢きんとし
て金を篩ふるふ

昂昂清節誰得比

昂昂たる清節 誰れか比するを得
ん

一竿尙能足爲蔭

一竿 尚ほ能く蔭を為すに足る

十五

梅

梅梅梅何其姿凜
暗香浮動獨闌眞
雪中清苦月中呻
宇宙神是作詩王
先題梅梢春吟斷

梅

梅梅梅 何ぞ其の姿、凜たる
暗香浮動して 独り眞を闌ひらく
雪中の清苦 月中の呻き
宇宙の神、是れ作詩の王なり
先づ梅梢に題して春に吟断す

十六

清興二首

飛雪翩翾如落花
忽白萬樹開銀花
宇宙誰能演此技
不許一點纖塵加

清興二首

飛雪翩翾として落花の如し
忽ち万樹を白うして銀花を開く
宇宙 誰れか能く此技を演ぜん
許さず 一点の纖塵の加ふるを

十七

同

花情雪意春如穹
參得雪月花底風
最是高心題神作

花情雪意 春、穹の如し
參じ得たり 雪月花底の風
最も是れ心を高むるは神に題する
の作なり

今夜我在此詩中

今夜 我れ此の詩中に在り

十八

擬東坡七絕

直視無前氣吐虹
千聖萬哲在胸中
相逢勿咎不相揖

東坡の七絶に擬す
直視無前 氣、虹を吐く
千聖万哲 胸中に在り
相逢ふも咎むるなかれ 相揖いふせざるを

只見神不見人叢

只だ神を見るのみ 人叢を見ず

十九

賣藏書千餘卷有感

一生學問抑何所獲
東西聖哲須超克
古今遺經亦糟粕
箒徹萬卷始見獨

藏書千余卷を売りて感あり

一生の學問 抑おさも何の獲る所ぞ
東西の聖哲 須らく超克すべし
古今の遺經も亦た糟粕なり
万卷を箒徹して始めて独を見る

二十

自嘲二首

和漢洋籍亂紛紛

風日南軒掃魚群

蠹魚學笑先生愚

君書亦不過人糞

自嘲二首

和漢洋籍 乱れて紛紛たり

風日 南軒に魚群を掃ふ

蠹魚、挙りて笑ふ 先生の愚を

君の書も亦た人の糞に過ぎず

二十一

人生有書何云愁

雪月花鳥引我遊

太似風流穴暮翁

叩舷日日歌江頭

人生 書あらば何ぞ愁を云はん

雪月花鳥 我を引き遊ぶ

太だ似たり 風流穴暮翁

舷を叩きて日日江頭に歌ふ

穴暮翁は、古代ギリシヤの風流詩人アナクレオン。

二十二

同

清臞立月影斜横

一任人呼成詩狂

此身元非仙聖比

前身是花後身鳥

清臞 月に立たば 影、斜に横た

一任す 人、呼びて詩狂と成すを

此の身、元と仙聖の比にあらず

前身、是れ花 後身は鳥

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

清臞は、清貧にて瘦せたるさまをさすか。

二十三

吾妻游草七首の一

山色水光兩相善

占斷明媚六月天

但得常如醉神嵩

山色水光 両つながら相善し

占断す 明媚六月の天

但だ常に神に酔ひたる嵩の如くな

るを得ば

何恨獨無詩仙篇

何ぞ恨まん 独り詩仙の篇なきを

神に酔ひたる嵩とは、スピノザをさす。

二十四

雲山蒼蒼題地詩

流水洋洋湛天美

神意無限創造曲

人生此間豈空死

雲山、蒼蒼として地の詩に題す

流水、洋洋として天の美を湛ふ

神意、無限なり 創造の曲

人、此の間に生き 豈に空しく死

せんや

二十五

讀傳道之書記感

空之空空哉總空

伝道之書を読みて感を記す

空の空 空なるかな 総て空なり

日下萬象何不空 日下の万象 何ぞ空ならざらんや

涅武業蘇門之華 涅武の業 蘇門の華

幻滅無痕空哉空 幻滅して痕なく 空なるかな 空

なり

涅武は、バビロン捕囚を行える新バビロニア王ネブカドネザール二世。蘇門は、ソロモン王。

二十六

同上

眞個空空一切空 眞個空空 一切空なり

茫茫宇宙完成中 茫茫たる宇宙 完成の中

莫問人間得失事 問ふなけれ 人間得失の事

雄怯凡聖流亦空 雄怯凡聖 流れて亦た空なり

二十七

祝基德降誕祭 基德降誕祭を祝ふ

余乎非余人非人 神か神にあらざるか 人か人にあらざるか

兼此二故曰神人 此の二を兼ねるが故に神人と曰ふ

一路開來新生道 一路、開き来れり 新生の道

萬人永欽頌嘉辰 万人 永へに欽び 嘉辰を頌がん

二十八

基德 基德

斯人以前無斯人 斯の人以前に斯の人なく

斯人以後無斯人 斯の人以後に斯の人なし

嗚呼基德兮基德 嗚呼 基德 基德

宇宙救主獨有斯人 宇宙の救主 独り斯の人あるのみ

二十九

同

一棄神榮下天界 一たび神榮を棄てて 天界より下る

謙虛成僕贖世罪 謙虚 僕と成りて世の罪を贖ふ

寶血流來何崇絶 宝血、流れ来ること 何ぞ崇絶ならん

十字架則更生胎哉 十字架は則ち更生の胎なるかな

十字架則更生胎哉 十字架は則ち更生の胎なるかな

三十

寸心録 寸心録

萬事無能只能詩 萬事無能にして 只だ詩を能くするのみ

高頌神榮成聖辭 神榮を高頌して聖辭を成す

長詩千篇斷武達 長詩千篇 断武達

夢見基德呼我師

夢に基德を見て我が師と呼べり

断武達は、ダンテ、ブラウニング、ダヴィデ（「詩篇」作者）。

三十一

同上

萬事不好只好書

万事好まずして 只だ書を好むのみ

東西賢哲集一堂

東西の賢哲 一堂に集ふ

談論風發擬道元

談論風發して 道元に擬す

脱落身心是我朋

脱落身心 是れ我が朋なり

三十二

同上

萬事不信獨信神

万事信ぜず 独り神を信ずるのみ

輕薄人生胡有仁

輕薄なる人生 胡なんぞ仁あらんや

神者我城我助也

神は我が城にして我が助けなり

無限力源是我神

無限の力源 是れ我が神なり

三十三

同上

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか（塩崎）

萬事不愛特愛生

万事愛せず 特だ生を愛するのみ

聖言化肉光融融

聖言、肉と化し 光、融融たり

宇宙至寶藏在腹

宇宙の至宝 蔵して腹に在り

贖血流磔是我救

贖血、磔に流る 是れ我が救ひなり

三十四

春興

吹徹二十四番風

吹徹す 二十四番の風

千紫萬紅競爭雄

千紫万紅 競ひて雄を争ふ

身閑處處堪行樂

身、閑にして 处处、行樂に堪へ

則知清福在箇中

則ち知る 清福、箇中に在るを

二十四番の風とは、二十四番花信風のこと、二十四節気のおのおのにおいてそれぞれの季節の花の開花をもたらす風のこと。

三十五

同上

草浴春雨青愈青

草、春雨に浴し 青、愈よ青なり

花醒春風榮益榮

花、春風に醒めて 榮、益す榮なり

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

滿眼紅紫一幅畫

滿眼の紅紫 一幅の画

正是新天新地情

正に是れ新天新地の情

三十六

夢乘大鳳夜行空

夢に大鳳に乗り 夜、空を行く

忽渡銀河入帝鄉

忽ち銀河を渡りて帝郷に入る

身正在純光之天

身、正に純光の天の在り

醒來簾外梅花風

醒め来らば 簾外 梅花の風

純光の天とは、ダンテ『神曲』「天国篇」に見える最も

高き天をさす。

三十八

修道學德失本心

道を修め徳を学びて本心を失ふ

聖歌一曲值萬金

聖歌一曲 万金に値す

經山曙雪雅湖月

經山の曙雪 雅湖の月

無限遺風朝夜吟

無限の遺風 朝夜に吟ず

經山は、ヘルモン山、雅湖は、ガリラヤ湖、ともにイエス伝道の地。

三十九

清興七首の一

去來出沒儘自由

去來出沒 儘ことごとく自由

烟霞山水無定住

烟霞山水 定住するなし

如花笑兮如鳥哭

花の如く笑ひ 鳥の如く哭く

即是斯翁風流哉

即ち是れ斯の翁の風流なるかな

これも、二十一同様アナクレオンを慕う詩か。

三十七

晚春絶句

晚春絶句

非晴非雨睡蓮天

晴にあらず 雨にあらず 睡蓮の天

非山非林在家仙

山にあらず 林にあらず 家に在るの仙

一日一生興無窮

一日一生 興、窮まりなし

老樂只有行至善

老樂は只だ至善を行ふにあるのみ

四十

智者不惑仁不憂

智者、惑はず 仁、憂へず

不惑不憂何有詩

不惑不憂に何ぞ詩あらんや

撥無仁智狂愚時

仁智を撥無して 狂愚の時

即知咏歎總是詩

即ち知る 咏歎、総て是れ詩なる
ことを

四十三

同上

四十一

同上

清愁孤愁詩中詩

清愁孤愁 詩中の詩なり

若人無愁安有詩

若し人、愁なくば安んぞ詩あらん

不屬富貴傲遊夜

属せず 富貴傲遊の夜

還在枕草對鬪時

還た在り 草に枕して鬪に対する
の時

窮通は窮と通、不如意と如意、困窮と栄達である。

四十四

寄雲記感

雲に寄せて感を記す

卷舒隨風何處之

卷舒、風に随ひて何処に之かん

身似孤雲任天意

身、孤雲に似て天意に任ず

勿言是全無用物

言ふなかれ 是れ全く無用の物なるを

少年野望悉影絶

少年の野望 悉く影、絶え

老氣横天地皞潔

老氣、天に横はりて 地、皞潔たり

怪底今朝振長筆

怪底して 今朝 長筆を振はば

須彌八裂不見岳

須弥、八裂して 岳を見ず

莫亦化龍起雨時

亦た竜と化して雨を起こすの時な

からんや

四十五

閑吟

閑吟

像神人格何尊嚴

神に像りし人格 何ぞ尊嚴ならん

や

怪底、天来の造語か、徹底的に怪しむの意、という。

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか（塩崎）

不要付世上賞勳 要せず 世上の賞勳に付するを

龍鳳截斷黃金鎖 龍鳳、截断す 黄金の鎖

獨歩乾坤御風雲 乾坤に独歩して風雲を御さん

四十八

書懷 懷ひを書す

道也須臾不可離 道たるや 須臾も離るべからず

可離非道君鑑思 離るべきは道にあらず 君、鑑思

四十六

寥廓單亭逢主人 寥廓たる单亭に主人に逢ふ

一呼一諾自惺惺 一呼一諾 自ら惺惺たり

雖然無明未全去 然りと雖も 無明、未だ全く去ら

ずんば

將傾銀河清我靈 將に銀河を傾けて我が靈を清めんとす

且記神子常働句 且つ記せよ 神子常働の句

天歩後顧是阿誰 天に歩みて後顧するは是れ阿誰れぞ

四十七

同上

大智元來如大愚 大智、元來大愚の如し

單單工夫鈍機甫 単単たる工夫 鈍機甫

夢駕大鳳過太空 夢に大鳳に駕し 太空を過らば

浩蕩宇宙笑從吾 浩蕩たる宇宙 笑ひて吾れに従ふ

四十九

同上

世界劫火高何丈 世界の劫火 高きこと何丈ならん

不知滅民殘多少 知らず 滅民の残ること多少なる

鈍機甫は、鈍機とドン・キホーテを併せし語。

哀涙不禁戰後風 哀涙禁せず 戦後の風
鬪體怕寒草裡號 鬪體、寒を怕れて草裡に号く

五十

同上

皞皞太虚爛爛星

皞皞たる太虚 爛爛たる星

夜夜照人消無明

夜夜人を照らして無明を消す

上天路是下天路

天に上るの路は是れ天より下るの路

遍垂慈光濟衆生

遍く慈光を垂れて衆生を濟はん

五十一

春興

回首英雄悉成灰

首を回らせば 英雄、悉く灰と成れり

佳人末路亦哀哉

佳人の末路も亦た哀しきかな

多情欲問春夜月

多情、問はんと欲す 春夜の月

喜悲幾劫照得來

喜悲、幾劫か照し得て來れるや

五十二

幸成積寶於天身

幸にして宝を天に積むの身と成れり

乾坤贏得一道人

乾坤 贏け得たり 一道人

有緣即住無緣去

縁あらば即ち住し 縁なくば去る

一任春風送白雲

一任す 春風、白雲を送るを

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

宝を天に積む、とは、「マタイ伝」第六章第十九、二十

一節に基づく。「なんぢら己がために財宝を地に積むな、

ここは虫と錆とが損ひ、盗人うがちて盗むなり。なんぢら

己がために財宝を天に積め、かしこは虫と錆とが損はず、

盗人うがちて盗まぬなり。なんぢの財宝のある所には、な

んぢの心もあるべし。」

五十三

攀縁何要窮措大

攀縁、何ぞ要せん 窮措大

驢齡空送幻生涯

驢齡、空しく送る 幻生涯

即今相見堪相悅

即今、相見て相悦ぶに堪へたり

鏡裡儲得雪鬢絲

鏡裡、儲け得たり 雪鬢の糸

五十四

春夜暢暢春夢殘

春夜、暢暢として 春夢、残り

更堪春雨催春寒

更に堪へたり 春雨の春寒を催す

曉鐘未報曉星赫

曉鐘、未だ報いずして 曉星、赫

一卷輪書枕上看

一卷の輪書 枕上に看る

輪書とは、英ヴィクトリア朝の詩人ロバート・ブラウニ

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

ング作 "Ring and Book" (『指環と書物』) をさす。

五十五

清夜想

斯文墜地有誰尋

清夜の想
斯文、地に墜ち 誰れありてか尋

五十八

清興

清興

宇宙人生無古今

宇宙人生、古今なし

孔子一貫忠恕弘

孔子、一貫して 忠恕、弘まり

星夜獨立視天象

星夜、独り立ちて天象を視れば

則氏盛徳借衆行

則氏、徳を盛んにして 衆と借りに行く

特凝光彩照我襟

特に光彩を凝らして我が襟を照す

釋迦慈眼步中道

釈迦、慈眼にして中道を歩み

五十六

朝賢野聖在何處

朝賢野聖 何処にか在らん

醫蘇來能之大成

医蘇、来たりて能く之れ大成す

神州無處不蕪穢

神州、処として蕪穢ならざるはなし

『論語』「里仁第四」に「子、曰く「参よ、吾が道は一以て之れを貫く」と。曾子、曰く「唯」と。子、出づ。門人、問ひて曰く「何の謂ぞや」と。曾子、曰く「夫子の道は忠恕のみ」と。」とある。則氏は、ソクラテス。医蘇は、イエス。

傷心惟有原頭月

傷心 惟だ原頭の月あるのみ

曾照約翰凄面來

曾て約翰の凄じき面を照らし来る

約翰は、イエスに洗礼を授けたるバプテスマのヨハネをさす。敝衣、荒野にて宣教す。

五十九

無天下物比我魂

天下の物、我が魂に比するなし

王侯榮華輕於萱

王侯の榮華 萱よりも輕し

赫赫富貴何爲者

赫赫たる富貴 何爲る者ぞ

五十七

萬里風光萬里詩

万里の風光 万里の詩

歴山豈得加太禪 歴山、豈に得んや 太禪に加ふる

を得んや

歴山、アレクサンドロス大王。太禪は、ディオゲネス。

六十

偕神起偕神働休

神と偕に起き 神と偕に働きて休
ふ

生死榮辱任天猷

生死榮辱 天猷に任す

感謝而受感謝與

感謝して受け 感謝して与ふ

絶滅三病樂八酬

三病を絶滅して八酬を樂まん

八酬とは、「マタイ伝」第五章第三十節に見える信仰

によりて得られる八種の報酬をさすか。「幸福なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり。幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がん。幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者、その人は飽くことを得ん。幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称へられん。幸福なるかな、義のために責められたる者、天国はその人のものなり。」

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか（塩崎）

六十一

明月聖魂清澄澄

明月聖魂 清くして澄澄たり

太虚寥廓曠超超

太虚寥廓 曠くして超超たり

人生眞教心白於雪

人生、真に心をして雪よりも白か

縦會劫風終不銷

縦たひ劫風に会ふも終に銷きえず
らしむれば

六十二

夙奉聖教持十善

夙に聖教を奉じて十善を持す

一點素心別有傳

一点の素心 別に伝ふるあり

孟偉亞鑄是吾師

孟偉亞鑄 是れ吾が師なり

詩林參得基德禪

詩林に參じ得たり 基徳の禪

十善は、十戒の堅持。孟偉亞鑄は、イスラエル歴代の預

言者モーゼ、イザヤ、アモス、エレミヤをさす。

六十三

暮年身世轉悠悠

暮年身世 転うた悠悠たり

常伴天涯浴神祐

常に天涯に伴さまうて神祐に浴す

昨夜明月今夜雨

昨夜の明月 今夜の雨

兩關教人銷聖愁

兩関、人をして聖愁を銷せしむ

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

四五

両関とは、悲喜、得失、栄辱、生死、存亡などの人生関頭の両極をさす。

六十四

懷古聖

古聖を懷ふ

春風戰而櫻花飛

春風、戦ぎて 桜花、飛び

萬山帶青兮燕再歸

萬山、青を帯びて 燕、再び歸る

梅有馨兮蘭有芳

梅に馨あり 蘭に芳しきあり

懷古聖兮不能忘

古聖を懷ひて忘るる能はず

駕鸞艦兮渡銀河

鸞艦に駕して銀河を渡り

乘電車兮揚人波

電車に乗りて人波を揚ぐ

喇叭鳴兮發凱歌

喇叭、鳴りて凱歌を発し

戰勝極而悲哀多

戦勝、極まりて 悲哀、多し

隆祥幾何兮衰奈何

隆祥、幾何ぞ 衰ふるを奈何せん

征露軍凱旋時の作か。

六十五

我所思

我が思ふ所

我所思兮在聖都

我が思ふ所は聖都に在り

欲行達之天步難

行きて之れに達せんと欲せば 天

歩、難し

側身遠望淚沾袂

身を側てて遠望すれば 涙、袂を沾す

神人贈我以聖靈

神人、我に贈るに聖靈を以てす

魂躍心熱將獻身

魂、躍り 心、熱し 將に身を獻

道遠縹緲莫致信

道、遠きこと縹緲として信を致す

但有神子爲橋梁

但だ神子ありて橋梁と為すのみ

由彼昇天視神亮

彼に由りて昇天すれば神を視るこ

惆悵狐疑亦何用

惆悵たる狐疑 亦た何ぞ用ひん

獨山行

独り山に行く

飄然冒險獨山行

飄然として冒險し 独り山に行く

指導依神心太康

指導、神に依らば 心、太だ康し

松籟谿流步步響

松籟谿流 歩歩に響き

宛如仙歌殷殷爽

宛如仙歌の殷殷として爽なるが如

朗然心澄如嶺雪

朗然として心、澄みて嶺雪の如く

超然魂躍與天合

超然として魂、躍りて天に合す

行路益險前程邈

行路、益す險しくして 前程、邈

行路益險前程邈

行路、益す險しくして 前程、邈

何日果達目的境

かなり

何れの日か果して目的の境に達せ

ん

雖然主歎非我願

然りと雖も 主や 我が願ひにあ

らず

旅程終焉有於邇

旅程の終焉、邇ちかきにありとは

縱令日暮道尙遠

縱令たとひ 日、暮れて 道、尚ほ遠し

も

枕石假睡天夢圓

石に枕して仮睡すれば 天夢、円まど

かなり

讚美歌「山路こえて」(西村清雄作詞、日本基督教団讚美歌

委員会編「讚美歌21」[日本基督教団出版局、一九九七]におい

ては七百六十九頁に四百六十六番として収載)を漢詩訳せるも

の。

六十七

我助來處

我が助けの來たる處

我向山而擧眼問

我れ山に向ひて眼を挙げて問ふ

我助者自何處來

我が助くる者は何処より來るや

答曰我助自天來

答へて曰く 我が助けは天より來

らん

自造天地彌榮來

天地を造れる弥榮より來らん

彼不赦被覆汝脚

彼れ赦さず 汝が脚の覆くぶさるるを

護汝曾無微睡催

汝を護りて 曾て微睡も催すなし

日星不擊月不傷

日星、撃たず 月、傷けず

靈肉安危守得隗

靈肉の安危 守り得て隗たかし

我與此神等榮辱

我れ此の神と榮辱を等しうす

我如何畏萬禍哉

我れ如何いかでか万禍を畏れんや

弥榮は、エホバ。この詩は、「詩篇」第百二十一篇「京みやこ

まうでの歌」に基づく。「われ山にむかひて目をあぐ わ

が扶助たすけはいづこよりきたるや わがたすけは天地あめつちをつくり

たまへるエホバよりきたる エホバはなんぢの足のうごか

さるゝを容ゆるしたまはず 汝をまもるものは微睡まじろみたもふこと

なし 視よイスラエルを守りたまふものは 微睡まじろみこともな

く寝ねることもなからん エホバは汝をまもる者なり エホ

バはなんぢの右手みぎのてをおほふ蔭なり ひるは日なんぢをうた

ず 夜は月なんぢを傷うたじ エホバはなんぢを守りてもろも

ろの禍害わざはひをまぬかれしめ 並またなんぢの靈魂たましいをまもりたまは

ん エホバは今よりとこしへにいたるまで 汝のいづると

入るとをまもりたまはん」

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

六十八

讀比立非書記感 比立非書を讀みて感を記す

莫問過去善惡評 問ふなかれ 過去善惡の評

前進唯當望天標 前進して唯だ当に天標を望むべし

忘我忘後亦忘利 我れを忘れ 後を忘れ 亦た利を

偏期天上由主褒 偏ひとへに期す 天上、主に由るほまれの褒

憶有茲彼必示則 憶おもひ茲ここにあらば 彼れ必ず則を示

成人我儕皆同調 人ひとと成れる我儕われら 皆な調べを同う

長嗟空寂人間業 長ちやうさ嗟す 空寂なる人間の業

諦觀不滅神工豪 諦觀す 不滅なる神工の豪

最後享試練坩埚 最後さいごに試練の坩埚かんづいを享け

鑄却萬渣到帝京 萬渣ばんさを鑄却して帝京に到らん

くべし、汝等もし何事にも異なる思を懐き居らば、神こ

れをも示し給はん。ただ我等はその至れる所に随ひて歩む

べし。」

六十九

一

嘉遯之賦

嘉遯かとんの賦

君不見神州英靈界 君見ずや 神州英靈の界

今化工場盛吐煤 今、工場と化して盛んに煤を吐く

亦不見俊豪竝起地 亦た見ずや 俊豪、並び起ころの

地 空しく匹夫をして互いに財を貪ら

空教匹夫互貪財 空しく匹夫をして互いに財を貪ら

しむ

東西南北是誰家 東西南北 是れ誰が家ぞ

源平織豊安在哉 源平織豊 安いづくに在りや

以下七十三まで一連の詩である。嘉遯は、『易』「遯卦」

を見よ。

七十

二

一

又不見道傍癡鼓皮 又た見ずや 道傍癡鼓の皮

唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向ひ

て励み、標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由り

て上に召したまふ召にかかはる褒美を得んとて之を追求む。

されば我等のうち成人したる者は、みな斯のごとき思を懐

「ヒリピ書」第三章第十三〜十六節に、斯くある。「……

一入國手濟世難

一たび国手に入らば 世難を濟は

エレミヤ。

一鑑舊池藏蛟龍

一鑑の旧池、蛟龍を蔵し

七十二

呼雲起雨捲狂瀾

雲を呼びて雨を起こし狂瀾を捲く

四

放眼見六合歷史

眼を放ちて六合の歴史を見れば

君今去學嘉遜術

君、今 去りて嘉遜の術を学ぶ

盛衰興亡何夫慘

盛衰興亡 何ぞ夫れ慘ならんや

委名棄利捨世悅

名を委て利を棄て世悦を捨つ

此間卓爾放光者

此の間に卓爾として光を放てる者

礫了己身從醫洲

己が身を礫了して医洲に従はば

特以十爲選民冠

特だ十を以て選民の冠と為すのみ

心境朗然眼瑩徹

心境、朗然として 眼、瑩徹す

十とは、Jew (ユダヤ人) に対する宛て字。

知己別有開乾坤

知己、別に有りて乾坤を開く

七十一

医洲は、イエス。

三

亞武之信猛世祈

亞武の信 猛世の祈り

七十三

偉鞘之詩鑄美淚

偉鞘の詩 鑄美の淚

五

神光爲經神言緯

神光、經と為り 神言、緯なり

嗚呼人生茫茫不可測

嗚呼 人生、茫茫として測るべ

聖知聖靈凝成文

聖知聖靈、凝りて文と成る

靈界邈邈何輕論

靈界、邈邈として 何ぞ輕ろが

逆眞理滅行義生

眞理に逆らはば滅び 義を行はば

靈界邈邈何輕論

ろしく論ぜんや

審判一下儼無紛

審判一下、儼として紛ふなし

聖化圓成君莫疑

聖化の円成 君、疑ふなかれ

亞武、アブラハム。猛世、モーゼ。偉鞘、イザヤ。鑄美、

權獨在大能手存

權は独り大能の手に在りて存す

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか (塩崎)

四九

七十四

閑適

閑適

浮世稍悟萬事空

浮世 稍く悟る 万事、空なるを

一擲乾坤付桑滄

乾坤を一擲して桑滄に付す

蘇門榮華刹那夢

蘇門の榮華 刹那の夢

偉達詩賦無窮功

偉達の詩賦 無窮の功

月夜難忘罔迫祈

月夜 忘れ難し 罔迫の祈り

花朝偏戀經山風

花朝 偏へに恋ふ 經山の風

切喜依信被義日

切りに喜ぶ 信に依りて義を被るの日

聖魂自由駈宇宙

聖魂、自由にして宇宙を駈く

蘇門、ソロモン王。偉達、イザヤ、ダビデ。罔迫はゲツ
セマネ、經山はヘルモン山ともにイエスゆかりの地。

七十五

同上

雪髮蕭散餞餘齡

雪髮、蕭散として 余齡を餞る

史中賢哲來降靈

史中の賢哲、来りて靈を降す

護枕長屏題名筆

枕を護る長屏 名筆を題し

横楣短額寫詩聖

楣に横ふ短額 詩聖を写す

高懷素是難合世

高懷、素より是れ世に合ひ難し

秀句爭可教俗聽

秀句、争でか俗をして聴かしむべけんや

一入靈界遺萬事

一たび靈界に入らば 万事を遺る

時觀脚底橫長虹

時に脚底に横たはれる長虹を觀ん

七十六

默庵

默庵

住谷天來號默庵

住谷天來、默庵と号す

終日默兮終夜默

終日、黙して 終夜、黙す

仰天默兮俯地默

天を仰ぎては黙し 地に俯きては黙す

見山默兮見河默

山を見ては黙し 河を見ては黙す

見花見月見雪默

花を見 月を見 雪を見ては黙し

默默默默何夫悠

默默默默として 何ぞ夫れ悠ならんや

悠悠天地本默默

悠悠たる天地 本とより默默

人生只有學一默

人生、只だ一黙を学ぶにあるのみ

七十七

咏筆禍

筆禍を咏ず

布衣憂國如偉鑄

布衣、國を憂ふこと偉鑄の如し

直筆蒙禍似韓董

直筆して禍を蒙ること韓董に似た

人皆笑曰狂我獨曰 人、皆な笑ひて狂と曰ふ 我れ独り曰ふ

り曰ふ

今時抑是何時歟 今時は抑も是れ何れの時か

我怪人悉不狂事 我れ怪しむ 人、悉く狂せざる事を

を

嗚呼我真愛我狂 嗚呼 我れ真に我が狂を愛す

狂基狂豪則我友 狂基 狂豪 則ち我が友なり

於是乎我獨喜 是に於いてか 我れ独り喜ぶ

有我友於世也 我が友の世にあるを

も狂人と目されぬ。」とある。明治の基督者の面目躍如である。この詩、昭和十四年六月に天来発行の「聖化」誌発禁に当たりて、詠みしもの。

七十八

笑無感謝之歌

神者義人與惡人無揀擇

照日降雨給光被其恩澤

噫何等恩寵憶誠感謝哉

然怪滔滔天下人 然るに怪しむ 滔滔たる天下の人

爲何穆如不嬉乎

今我卒然出此語 今、我れ卒然として此の語を出ださば

世人聽之局局嗤

世人、之れを聴きて局局として嗤ふ

世人皆笑最宜兮

世人、皆な笑ふは最も宜し

我亦見之驅驅啞

我れも亦た之れを見て驅驅として啞ふ

偉鑄、イザヤとエレミヤ。韓董、韓愈と董狐。唐の元和十四年（八一九）、時の刑部侍郎韓愈は、憲宗への「論仏骨表」奏進により瘴癘の地・潮州に流罪となった。その際、つくりし七律「左遷至藍関示姪孫湘」は古今無比の絶品として名高い。『左伝』宣公二年の条に孔子は、趙盾の霊公弑逆の事実をありのままに記録にとどめた史官・董狐を「董狐は、古への良史なり。法を書して隠さず。」と激賞している。韓董ともに直筆不屈の士の典型である。狂基とは、世俗とは異なる価値を強調せるキリストを狂をもって呼びたるなり。また、狂豪とは、天来自身の語を借りれば、「吉田松陰や頼三樹や蒲生君平やの如き志士をいふ、何れ

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか（塩崎）

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

輾轢局局笑不休
直笑徹到彌勒時

輾轢局局として笑ひて休まず
直ちに笑徹して彌勒時に到らん

七十九

戲畫

戲画

天上聖綸如玄宮
地上俗營似蟻塔
函蓋乾坤縱雖密
吞舟魚往往脫網
隨波逐浪悉截斷
眞如佛法去盡及
緬想人生一戲畫
何獨鳥伯與樂公

天上の聖綸 玄宮の如し
地上の俗營 蟻塔に似たり
函蓋の乾坤 縦し密なりと雖も
吞舟の魚 往往にして網を脱せん
隨波逐浪 悉く截断す
眞如仏法 尽及し去り
緬想すれば 人生、一の戲画なり
何ぞ独り鳥伯と樂公とのみならんや

去尽及は、語法上正しくは尽及去とすべきであろう。鳥伯は、鳥羽僧正。樂公は、北沢樂天。ともに戲画で名を馳す。

八十

遊戯三昧

遊戯三昧

敢不求奇骨認世

敢て奇骨の世に認めらるるを求めず

但喜曠懷賦離騷

但だ喜ぶ 曠懷 離騷を賦すことを

非迷非悟獨坦然

迷ふにあらず 悟るにあらず 独り坦然たるのみ

非聖非哲寧近狂

聖にあらず 哲にあらず 寧ろ狂に近し

默默振筆描虬龍

默默として筆を振ひて虬龍きうりゆうを描き

片片延紙錄感想

片片、紙を延べて感想を録す
遊戯して此に到り三昧に入る

遊戯到此入三昧

冥茫八極來映胸
認世の語は、坐りが悪い。改むべきか。

八十一

閑中高趣凌普老

閑中の高趣 普老を凌ぎ

身似維摩病默牀

身、維摩に似て 病みて牀に黙す
主人を喚起すれば 諾して墨を磨す

喚起主人諾磨墨

長鋒拂雲龍煙香
門前無客來風月

長鋒もて雲を払はば 竜煙、香る
門前に客なく 来たるは風月

案頭有書斷武莊

案頭に書あり 断武莊

問我歸天抑幾日

問ふ 我れ天に帰するは抑も幾日

笑指西山夕陽紅

笑ひて指す 西山夕陽の紅

普老は、プラトン。断武莊は、天来愛読のダンテ、ブラウニング、莊子。

八十二

閑適

閑適

夙自辭牧羊聖職

夙に牧羊の聖職を辞してより

隨波逐浪風來身

隨波逐浪 風來の身

一管金筆長相隨

一管の金筆 長く相隨ひ

萬卷圖書飛成塵

萬卷の圖書 飛びて塵と成る

畫樓賞雪草庵夕

畫樓 雪を賞す 草庵の夕

大道吟詩月花晨

大道 詩を吟ず 月花の晨

行路有客若問我

行路 客ありて 若し我れに問は

獨步乾坤一閑人

乾坤を獨歩するの一閑人なりと

八十三

行尋古古既過流

行きて古を尋ぬれば 古、既に過

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

坐見今今去不留

坐して今を見らば 今、去りて留

四時變轉何夫速

四時變轉すること 何ぞ夫れ速き

生死交謝暫不休

生死交謝して 暫しも休まず

誰能賢而誰能愚

誰れか能く賢たりて 誰れか能く

誰能誇富誰耻窮

愚ならん

誰能誇富誰耻窮

誰れか能く富を誇り 誰れか窮せるを耻ぢん

榮枯畢竟波上沫

榮枯 畢竟 波上の沫

醜美凡聖均入邱

醜美凡聖 均しく邱はかに入る

飄然徠茲飄然徂

飄然として茲に徠きたり 飄然として徂ゆく

回首一代蜃氣樓

首を回らさば 一代の蜃氣樓

八十四

世上素無聖全人

世上、素より聖く全き人なし

此身只合傲醫洲

此の身、只だ合に医洲はらに傲ふべし

風搖人生縹緲月

風は揺るがす 人生 縹緲の月

帆孕學海浩蕩秋

帆は孕む 學海 浩蕩の秋

有花出借衆可娛

花あらば 出でて衆と借に娛しむ

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

四六

無金山水須清遊
老來閱盡盛衰事
萬化惟應一笑酬

金なくば 山水に須く清遊すべし
老來、閱し尽す 盛衰の事
万化 惟だ応に一笑もて酬ゆべし

八十五

悠悠人生想幾更

悠悠たる人生 想ひ、幾たびか更
まる

直直向上一路明

直直として向上すれば 一路、明
らかなり

春有百花夏涼風
秋有名月冬雪英
四時佳興何非詩

春に百花あり 夏に涼風あり
秋に名月あり 冬に雪英あり
四時の佳興 何ぞ詩にあらざらん
や

宇宙善美溢六合

宇宙の善美 六合に溢る

咏歎久之忽執筆

咏歎、之れを久しうして 忽ち筆
を執らば

雲起龍躍身神往

雲、起こり 竜、躍りて 身は神
往す

八十六

題寒山之圖

寒山の図に題す

蓬頭垢面形恰似蠻
作詩作佛而妙絕贊
人若問姓呵呵大笑

蓬頭垢面 形、恰も蛮に似たり
作詩作仏、妙にして 贊を絶す
人、若し姓を問はば 呵呵とし
て大笑す

誰知是文珠扮寒山

誰れか知らん 是れ文珠の寒山
に扮せるを

八十七

虹霓

虹霓

驟雨一過山有色
碧天澄澄水無聲
毫端點出夕陽路
人冠虹霓肅然行

驟雨、一過して 山に色あり
碧天、澄澄として 水に声なし
毫端に点じ出だす 夕陽の路
人、虹霓を冠りて 肅然として行
く

八十八

成道

成道

八九七十二成道
呵釋罵孔弔老莊
廿四番花信來處
我則倣墨御長風

八九七十二にして成道し
釈を呵し 孔を罵り 老莊を弔ふ
廿四番の花信、来たる処
我れ則ち墨に倣ふて長風を御さん

廿四番の花信は、すでに三十四に出でたり。墨は、墨子をさす。非攻兼愛を旨とす。

八十九

默想二首

神人道廢徳日衰

神人の道、廢れ 徳、日に衰ふ

劫風幾度涙沾衣

劫風、幾たびか度りて 涙、衣を

沾す

蚌含玄兔深深意

蚌、玄兔を含む 深深の意

天高地濶説向誰

天、高く 地、濶く 説くに誰れ
に向かはんや

九十一

題櫻

人是武士花是櫻

人は是れ武士 花は是れ櫻

日人魂全似此櫻

日人の魂 全く此の櫻に似たり

將可死死可生生

將に死すべくして死し 生くべくして生く

忠勇義烈潔貞操

忠勇義烈にして 貞操を潔うす

思想如花情魂火

思想は花の如く 情魂は火なり

風雅如月心膽鑿

風雅なること月の如く 心胆は

鉞なり

史上赫赫傳盛名

史上、赫赫として 盛名を伝ふるは

豈獨限義公楠公

豈に独り義公楠公に限らんや

千秋熱血染一色

千秋の熱血 一色に染め

萬古英靈三世薰

万古の英靈 三世に薫る

光争日月鎮八紘

光、日月と争ひ 八紘を鎮む

嗚呼偉哉武士美哉櫻

嗚呼 偉なるかな武士 美なる

かな桜

玄兔は、月の異名。『孔子家語』「執轡第二十五」に「蚌蛤龜珠、日月と与に盛虚す」、左思「呉都賦」に「蚌蛤の珠胎、月と与に虧全す」、明・葉子奇「草木子」に「南海、中秋に月あれば、則ち蚌胎に珠を生ず。月なければ、則ち否なり」とそれぞれある。

九十

自稱曰萬物靈長

自ら称して曰く 万物の靈長と

何況何處屬此身

何ぞ況んや 何処にか此の身を属

せん

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか（塩崎）

有之則以可橫天下行 之れあらば則ち以て横ざまに天

下に行くべし

恩威炳爛榮在神 恩威、炳爛として 榮、神に在り

九十二

歲晚即興

歲晚即興

嗚呼暮之暮哉

嗚呼 暮の暮なるかな

見渡限一切者暮

見渡す限り一切は暮なり

四方上下歩歩暮

四方上下 歩歩に暮

年云暮山河又暮

年、云に暮 山河も又た暮

市暮里暮城亦暮

市、暮 里、暮 城も亦た暮

文化沒落文明暮

文化、沒落して 文明の暮

世界亦暮人生暮

世界も亦た暮 人生、暮

盖國音暮者通墓

盖し國音に暮は墓に通ず

宇宙全滅悉入墓

宇宙、全滅して悉く墓に入り

劫風吹火又吹朱

劫風、火を吹きて 又た朱を吹く

虚空迸裂須彌碎

虚空、迸裂して 須彌、碎け

天地黯湛何慘憺

天地、黯湛として 何ぞ慘憺なる

審判既下龍蛙伏

審判、既に下り 竜蛙、伏し

基德再臨垂聖謨

基德、再臨して 聖謨を垂る

見新天新地之表

見よ 新天新地の表を

神偕人住人住神

神、人と偕に住し 人、神に住す

悠久無暮只有晨

悠久として暮なく 只だ晨あるのみ

竜蛙は、「ヨハネ黙示録」に出づ。その第十六章第十三・十四節に曰く「我また竜の口より、獸の口より、偽預言者の口より、蛙のごとき三つの穢れし靈の出づるを見たり。これは徵をおこなふ悪鬼の靈にして、全能の神の大なる日の戦闘のために全世界の王等を集めんとて、その許に出でゆくなり」と。

九十三

白雲

白雲

軒冕不足榮

軒冕、榮とするに足らず

山水我處景

山水、我が景ふ処

此中有白雲

此の中に白雲あり

飄飄任所嚮

飄飄として嚮く所に任ず

九十四

聖詩

聖なる詩

偶讀神人詩

偶ま読む 神人の詩

春窓雪滿地

春窓の雪 地に満てり

花淚下灑翁

花淚、下りて 翁に灑ぎ

欲歌無好辭

歌はんと欲すれど 好辭なし

九十五

輕羅將落二尺袂
柳條如舞水流螢
艷殺佳人私語處
溪畔嫋嫋晚風青

輕羅、將に落ちんとす 二尺の袂
柳條、舞ふが如く 水、螢を流す
艷殺す 佳人、私かに語れる處
溪畔 嫋嫋たり 晚風の青

九十七

堪笑默庵老且頑
神教野人猶味難

堪笑默庵老且頑
且つ頑なるを
神、野人をして猶ほ難を味はらしむ

集中唯一の豔詩なり。

九十六

閑窓書懷

歲月匆匆如電逝
回首萬感一時生
何堪老朽荷重課

閑窓に懷ひを書す
歲月、匆匆として電の如く逝く
首を回らさば 万感、一時に生ず
何ぞ堪へんや 老朽して重課を荷ふを

閑窓に懷ひを書す

緬想只喜知性明

緬想すれば 只だ知性の明らかなるを喜ぶのみ

才拙夙辭斗米職
性癖每耽詩書經
蓋棺事前有定名
世評何用鈍機朋

才、拙く 夙に斗米の職を辞す
性癖、毎に詩書の經に耽る
蓋棺事前に定名あり
世評、何ぞ用ひん 鈍機朋

鈍機朋、ドン・キホーテ。

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

妻瀨盲辛進赫路

妻、盲に瀨して 辛うじて赫路を進む

兒既逝在西方天
熟思未有一日聖

兒、既に逝きて 西方の天に在り
熟ら思ふに 未だ一日も聖なることあらず

幸頼主人永生寔

幸にして 主に頼りて 永生の寔に入る

況亦今年超稀嶺
朝駕劫風暮天還

況んや亦た 今年、稀嶺を超ゆ
朝に劫風に駕すれど 暮には天に還らん

九十八

東飄西泊自由身
一路直通天路新
鶯出幽谷囀喬木
獅吼曠野去來頻

東に飄ひ 西に泊す 自由の身
一路、直通して 天路、新たなり
鶯、幽谷に出でて 喬木に囀り
獅、曠野に吼えて 去來すること

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

頻りなり

函蓋乾坤風騷客
滅私奉公殉難人
夕陽有更照來世
影投後天整心襟

百花爛底衝雨歸
馬上人既畫中人
名管、正しくは名久多。子持山、名久多、ともに上州の地名。

風騷とは、『詩』『国風』と『楚辞』『離騷』。転じて詩歌をさす。

九十九

北毛遊草

北毛遊草

春將暮花雨蕭蕭

春、將に暮れなんととして 花雨、蕭蕭たり

綠將滴子規叫叫

綠、將に滴らんととして 子規、叫叫たり

我亦天外浩浩客

我れも亦た天外浩浩の客

咏歎何堪徹清霄

咏歎 何ぞ堪へん 清霄に徹するを

百二

月照八州歌

月、八州を照すの歌

團團月出懸原頭

團團たる月、出でて 原頭に懸かる

百

子持山北名管瀨
仙境別開春將暮

子持の山北 名管の瀨
仙境、別に開けて 春、將に暮れ

原頭月上照八州
八州平野千萬家
野人半解彈琵琶

原頭に月、上りて 八州を照らす
八州の平野 千万の家
野人、半ば解して 琵琶を弾ず

琵琶一曲腸將斷

琵琶一曲腸、將に断たんとす

風蕭蕭兮刀水寒

風、蕭蕭として 刀水、寒し

想昔關東用武處

想ふ 昔 関東、武を用ふるの処

河南河北多義人

河南河北に義人多し

寂寞山河依舊美

寂寞たる山河 旧に依りて美なり

超高烈士今有何

超高たる烈士 今、何くにあらん

可憐憂國賈生詩

憐むべし 憂國賈生の詩

獨醒空剩屈原辭

独り醒めて 空しく剩す 屈原の

醉神亭前見秋草

醉神亭前に秋草を見れば

秋草帶露蟲唧唧

秋草露を帯びて 虫、唧唧たり

長空歸雁聲嗷嗷

長空の帰雁 声、嗷嗷として

恰似訴民衆窮逼

恰も似たり 民衆の窮逼せるを訴

萬里清光一樓風

万里の清光 一樓の風

愁心偏向月中生

愁心 偏へに月中に向かひて生ず

國難頻來急於梭

國難、頻りに來ること 梭よりも

急なり

懷古慨今淚成行

懷古慨今すれば 涙、行を成す

蹶起殉道果幾人

蹶起して道に殉ふもの 果たして

幾人ぞ

浩浩意氣我傾誰

浩浩たる意氣 我れ誰れにか傾け

ん

不如飄然還父家

如かず 飄然として父が家に還り

與神戮力護帝基

神と力を戮はせて 帝基を護らん

には

風蕭蕭の句は、「史記」「刺客列伝」荆軻の条に見える

「風蕭蕭兮易水寒 壯士一去兮不復還」に基づけるもの。

賈生の詩とは、賈誼「弔屈原賦」をさすか。

百三

弔愛弟與愛婿之死 愛弟と愛婿との死を弔ふ

蠶業博名四十年 蚕業に名を博して四十年

善種貸人利不占 善種、人に貸し 利、占めず

孝三郎即好散郎 孝三郎は即ち好散郎なり

散盡零然死歸天 散じ尽し 零然として 死して天

に歸す

百四

嗚呼藤太藤太汝何狂 嗚呼 藤太 藤太 汝、何ぞ狂

せるや

狂死當知罪十條 狂死、當に罪十條と知るべし

可憐喪心囚魔鬼 憐むべし 喪心囚魔の鬼

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

四七〇

癡狂院裏哭癡狂 癡狂院裏 癡狂を哭く

嗚呼善哉其心以可歸天籍也 嗚呼 善きかな 其の心、

十餘年前知君聰 十餘年前 君が聰なるを知り

以て天籍に帰すべきなり

十餘年後見君狂 十餘年後 君が狂へるを見る

人生不定天與壽 人生、定かならず 天と寿と

靜仰東山萬恨長 靜かに東山を仰がば 万恨、長

し

百五

哀悼我子穆之急逝輓歌 我が子穆之急逝を哀悼す

るの輓歌

我子穆病而天折 我が子 穆 病みて天折す

為人淵默而雷發 為人 淵默にして雷発す

彼曾著笑之哲學 彼れ曾て笑の哲學を著す

然業半逝何速拔 然るに業半ばにして逝く 何ぞ

速拔なる

若教彼謂於臨終 若し彼をして臨終に謂はしむら

ば

猶同樂聖鼈子大覺 猶ほ樂聖鼈子の大覺と同じから

ん

諸君喜劇即畢焉 諸君よ 喜劇は即ち畢れり

宜爲我喝采而樂 宜しく我が爲めに喝采して樂し

むべし

百六

白鳥之歌

白鳥の歌

身隔幽明心不隔 身、幽明を隔てて 心、隔てず

相思一回心心婚 相思ふこと、一回にして 心、心

相慕一遍靈靈觸 相慕ふこと、一遍にして 靈、靈

人間宇宙本同根 人間と宇宙と 本と同根なり

四方上下融如水 四方上下 融けて水の如し

三界八紘銷似煙 三界八紘 銷えて煙に似たり

遙見救主坐天闕 遙かに見ゆ 救主、天闕に坐せる

諸聖均頌純光天 諸聖、均しく頌ふ 純光の天

を

諸聖均頌純光天

諸聖、均しく頌ふ 純光の天

亦見我兒宿父家

亦た見たり 我が兒、父が家に宿るを

讚歌瀏唳禮祈嚴

讚歌、瀏唳りうりやうとして 礼祈、嚴かな

祝福合流漲人海

祝福、合流して 人海みなぎに漲る

紛紛爭奪滅無痕

紛紛たる争奪 滅びて痕なし

神使群舞雲冉冉

神使、群舞して 雲、冉冉ぜんぜんたり

小立環佩鳴珊珊

小立すれば 環佩、鳴りて珊珊たり

長空邀我天縹緲

長空、我れを邀むかへて 天、縹緲たり

萬里一碧驂黃鸞

万里一碧 黄鸞そへうまを驂とす

相携一笑出雲表

相携へて一笑すれば 雲表に出で

徐觀金烏飛玉瀾

徐ろに觀たり 金烏の玉瀾を飛ばせるを

これは辞世に擬せるものにあらず。故人に懐いを馳せる詩なり。前掲の長谷川周治序を参照せよ。金烏は、太陽の異名なり。

百七

步虚之歌

虚を歩むの歌

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

鴻雁燕鶯去又来

鴻雁燕鶯 去りて又た来たる

落木枯草華亦開

落木枯草 華、亦た開く

雨注雪嶺江漲樓

雨、雪嶺に注ぎ 江、楼に漲る

風吹櫻花雪亂臺

風、桜花を吹き 雪、台に乱る

萬人等觀笑且泣

万人、等しく觀て 笑ひ且つ泣く

世事茫茫幾成壞

世事、茫茫として 幾たびか成壞せん

可憐如露如電身

憐れむべし 露の如き電の如き身を

古冢漸平新塚高

古冢こちやう、漸く平らかにして 新塚しんちやう、高し

莫笑白日提提燈

笑ふなかれ 白日、提燈ひつたけを提ぐるを

隨時隨處搜人行

隨時隨處 人を搜して行く

鶴歸北冥逾千載

鶴、北冥に歸りて 千載を逾え

龜沒南溟萬年更

龜、南溟に没して 万年、更まれり

世界風濤荒又荒

世界の風濤 荒れに又た荒る

一言鎮波在醫蘇

一言にして波を鎮むるは医蘇に在り

百八

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

魂挾宇宙遊八紘 魂、宇宙を挟みて 八紘に遊び
身托大能眠聖居 身、大能に托して 聖居に眠らん

悠悠天地都絶賛 なし
悠悠たる天地 都て賛を絶てり

七句目の第二字、原文では狹とあるを誤字と見做し改めた。

百九

自重心 自重心

予内有一寶 予の内に一宝あり
獨一無匹儔 独一にして 匹儔ひつりょうなし
縮之藏方寸 之れを縮むれば 方寸に蔵し
伸之充宇宙 之れを伸ばさば 宇宙に充つ
君若不是信 君、若し是れ信ぜざれば
相逢不相揖 相逢ふも 相揖せず

分付櫻花管領春

桜花に分付して 春を管領せしむ

分付は、分附と同意。

百十二

讚醫蘇

医蘇を讚ふ

仰之彌高鑽彌固

之れを仰がば、弥いよ高く 鑽まらば、
弥よ固し

百十

清興

清興

漫漫者雪旭日燦 漫漫たるは雪にして 旭日は燦た

修養工夫百練時

修養工夫 百練の時

詩趣横逸沸如泉

詩趣、横逸して 沸くこと泉の如

百十三

品山評水描無筆

山を品し 水を評すも 描くに筆

偶感三首之一

偶感三首の一

斷武詩篇莊蘇文

斷武の詩篇 莊蘇の文

百十六

私淑何辭夙夜勉

私淑 何ぞ辞せん 夙夜に勉むを

口似聖人心似魔

口、聖人に似るも 心、魔に似る

但哀一鳳回天曲

但だ哀しむ 一鳳、天を回るの曲

廣衢振手人家時

廣衢 手を振りて家に入るの時

吟賦低調伍鴉群

吟賦、低調にして 鴉群に伍すを

無明山上誰撞鐘

無明山上 誰れか鐘を撞く

覺破迷夢見神子

迷夢を覺破して 神子を見たり

斷武、ダンテとブラウニング。莊蘇、莊子と蘇東坡。

百十四

高天原頭花一枝

高天原頭 花一枝

聖堂只見青苔封

聖堂 只だ見ゆ 青苔の封

丰標威壓萬花美

丰標、威圧す 万花の美

靈界無人導我宗

靈界 人として我が宗を導くなし

神子信手一拈之

神子、手に信せて之れを一拈すれ

滿山落花春過後

滿山、落花して 春、過ぐるの後

ば

杜鵑啼血夕陽紅

杜鵑、血に啼きて 夕陽、紅なり

無限春風永吹香

無限の春風、永へに香を吹かん

百十八

聖圓心漲滿太虛

聖く円かなる心、漲りて 太虚に

満つ

山高水白草青青

山、高く 水、白く 草、青青た

寒潭明月轉玉壺

寒潭の明月 玉壺を転ず

天外無人地無跡

天外に人なく 地に跡なし

長夜時結三界夢

長夜、時に結ぶ 三界の夢

宇宙默默靈有聲

宇宙、默默として 靈に声あり

偉想卓卓一身孤

偉想、卓卓として 一身、孤なり

百十九

我家宗旨

我が家の宗旨

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか (塩崎)

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか（塩崎）

四七

翰墨二期養我生

翰墨、元より期す 我が生を養ふ

無限春愁家國深

無限の春愁 家國に深し

何苦齷齪求利名

何ぞ苦しみて齷齪として利名を求

百二十一

めんや

宇宙史詩見興亡

宇宙の史詩に興亡を見

人類記録詳性情

人類の記録に性情を詳かにす

古往如水流轉轉

古往、水の如く流れて 転転たり

今來似夢覺涼涼

今來、夢に似て覚めて 涼涼たり

我家宗旨君能識

我が家の宗旨 君、能く識れり

敬神愛人俱步光

神を敬ひ人を愛し俱に光に歩むなり

我が家の宗旨 君、能く識れり

必頼神成護國基

必らず神に頼りて護國の基と成れ

百二十

愛甥住谷悦治爲同

愛甥住谷悦治、同志社大学教授

志社大學教授年正

と為る、年、正に四十、偶ま動

四十偶領動員令將

員令を領け、將に出でて支那に

出赴支那余即送其

赴かんとす、余、即ち其の行を

行臨別餞二首

送り、別れに臨みて二首を餞とす

す

黃河灑淚揚江血

黃河、涙を灑ぎ 揚江は血なり

血淚併吞戰士心

血淚、併せ吞む 戰士の心

死生有命只托神

死生、命あり 只だ神に托すのみ

内村鑑三「戦時に於ける非戦主義者の態度」(『内村鑑三全集』四十巻本、岩波書店)第十二巻、百五十頁以下)を参照せよ。

百二十二

時事即吟

時事即吟

愛慾之淵人我崖

愛慾の淵 人我の崖

兄弟鬩牆一家隈

兄弟、牆に鬩ぐ 一家の隈

從來好說基德教

從來、好みて説けり 基徳の教へ

現下何爲附死灰

現下、何為れぞ死灰に附せんや

百二十三

眼裡有塵四海闇
心頭無事一天寬
萬國交戰屍邱暮
望斷妖雲獨泣欄

眼裡に塵あらば 四海、闇なり
心頭、無事なれば 一天、寛し
万国、戦を交ふ 屍邱しきうの暮
望み、妖雲に断えて 独り欄に泣く

百二十四

六十五年夙求全
七百七夜月明天
拱手思料作未成

六十五年 夙に全きを求む
七百七夜 月明の天
手を拱こまねきて思料すれど 作、未だ成らず

尚逐神光描大圓

尚ほ神光を逐ひて大円を描かん

右は「鬻鬻録」の九に所収の作。

百二十五

近咏
吟遊坐賦知何窮
多年幻影舞如鳩
今夜香山客中夢
分明懸在曙星眸

近咏
吟遊坐賦 知る 何ぞ窮せるを
多年の幻影 舞ひて鳩の如し
今夜の香山 客中の夢
分明に懸りて在り 曙星の眸

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)

卷頭詩である。

百二十六

老将躬耕作自家米

老いて将に躬ら耕作せんとす
自家の米

不幸奈無尺寸之田

不幸にして 尺寸の田もなきを
奈いかんせん

寧如出市而求大盥

寧ろ市に出でて大盥だいかんを求むるに
如かんや

沐日而私欲學太翁

日に沐して私かに太翁に学ばんと欲す

卷末詩。太翁は、ディオゲネス。

百二十七

血種汗耕幾春秋

血もて種うゑ 汗もて耕すこと 幾
春秋

犠牲須凌古俠風

犠牲 須らく古侠の風を凌ぐ
胸中の磊塊ういかい 若し魂に藴うまば

他日必興内村宗

他日、必ず興らん 内村宗

この詩は、長谷川の序中にみえるもの。磊塊は、心中に

不平のあるさまをいう。

7

政池仁による跋文、近時の風潮を顧みて読むとき、頗る示唆に富む。よって以下に抄出す（圏点は引用者の附せるもの）。

正直の処、私はもと漢文とか漢詩とか云ふものは好きでなかつたのである。内村鑑三先生について福音を知るに及んで、論語や孟子などを律法の書としてでなく読む事を覚えて、經書は多少好きになつたが、漢詩に対しては殆ど関心を持たなかつた。此の校正を依頼された時にも、漢詩など果して校正し得るのかを危ぶんだのである。然るに一度之を始むるや、雄渾簡直なる金言名句の連発に全く己を忘れ、我もなく、他人もなく、たゞたゞ詩中に融け込んでしまつたのである。そして私自身住谷先生の好きな鳳凰の翼にのせられて天の高きに昇り、皮膚の各毛穴より凡ての毒氣が抜け去つてしまふ如き爽快さを覚えた。私はこゝに始めて漢詩の妙味を知つた。無限の大真理を短い一言でかくも力強く云ひ現し得るもの。漢詩を措いて他に絶対のない事がわかつた。今迄漢詩が好きでなかつたのは、器たる詩文が余りに善すぎて、盛られる内容たる思想が之に比して見劣りした為である。然るに此処に天地の大真理基督教に徹したる大先生が、其の妙技を揮つて真

理の花枝をこの名器にいみじくももられたのである。想余つて言足らざるに非ず、言過ぎ想及ばざるに非ず、高想佳言よく均衡して、見る者をして驚歎せしめないでは措かないのである。私の漢詩に対する感情の一大革命を起したのも無理はない。そして、また以下のように続く。

併し思ふに世に之に超ぐる漢詩集が再び現れ得るであらうか。否、と私は思ふ。明治二年と云ふ時に生れられて、旧き日本と新しき日本を二つ乍ら生きられた住谷先生にのみよくこの事が出来る。今からの新人には到底先生の様に漢詩を自由にする事は出来ぬ。誠に先生は漢詩を以て宇宙の真理を讃へるに最も適した時代に、最も適した処に生れたのである。此詩鈔を読んで何人も感ずる事は、其思想の内容が洋の東西、時の古今に通じて実に実に広い事である。ユダヤの思想あり、ギリシヤの思想あり、英あり、独あり、仏あり、併して支那あり、また印度あり、世界の文明の凡ての河流が此中に流れ込んでゐる。而も若し西洋と東洋の両思想を混然として此中に盛られたのであるならば左程の価値はない。之を世界無比の大和魂を以て融和して、東海の日本国でなくては歌へない歌が唱はれたのである。先生は矢張時代の所産である。そして時代が神の造り給へるものであるならば、先生は又此時代を指導する為に神の特に遣し給へる詩人と云ふ事が

出来よう。

8

新しき酒は新しき革袋に納れよ、という。『聖書』の言なり。新しき思想は新しき器へ、旧き思想は古き器へ、新しき酒を旧き革袋に盛らば両つながら損なわる、との謂であるが、新しき思想、必ずしも依るべき思想にあらず、旧き思想、必ずしも斥くべき思想にあらず。万事新しきに就き、旧きを斥くるは、かの〈文明開化〉者流の単純極まりなき発想なり。漢詩という古き器に、原始の福音という旧き思想を盛る。無比の妙境、天来の詩中に現る。偉というべし、壮というべし。

漢詩、世に儼然としてあり。それに手を染むるや否やは、各々に任せられたり。旧き思想、尊ぶべきもあり、斥くべきもあり。要は、盛るに活潑潑地の活思想にあらざれば、あたら高貴瑰麗の器も死灰土芥に帰す、ということのみ。

(二〇〇一年十二月十三日攔筆)

漢詩はいまだに思想を盛る器たりうるか(塩崎)